

学校教育における海洋スポーツ活動の諸条件

—国内で初めて教科体育にヨット種目を取り入れた山形県鼠ヶ関小学校の事例から—

谷 健二*, 松下 雅雄*, 柳 敏晴*, 鈴木 漠**

Marine Sports Programs as part of the School Education System
— An analysis based on the situation at Nezugaseki Elementary School Yamagata
Prefecture, at which Japan's first yachting course at the level has been
introduced into the Physical Education Curriculum —

Kenji TANI*, Masao MATSUSHITA*, Toshiharu YANAGI* and Hiroshi SUZUKI**

Abstract

The situation was analyzed from the viewpoint of (1) the facilities and equipment, (2) the instruction system, (3) the safety measures and so on with reference to Nezugaseki Elementary School which has introduced Japan's first yachting program into the physical education curriculum.

After examining the system in operation at Water Wise, New Zealand, the following conditions were implemented at that school:

1. The utilization of facilities and equipment in the vicinity.
2. The use at local specialist instructors in addition to the school's own teaching staff.
3. The deployment of a rescue boat as a safety measure, the wearing of life-jackets by each participant, and the scheduling of classes only under favorable weather conditions and at the appropriate season.

KEY WORDS: 小学校, 教科体育, 海洋スポーツ, ヨット種目

*Elementary School, Physical Education Curriculum, Marine Sports,
Yacht Program*

はじめに

近年, 青少年の健全育成において海辺における自然学習や環境教育が注目されている。とくに昨年度は文部省をはじめとする海岸事業所管五省庁

(文部省, 農林水産省, 運輸省, 建設省, 水産庁) が「青少年期における海洋活動あるいは海洋スポーツ活動を通じての自然体験により, 広く自然環境の価値や雄大さに対する理解を深め, 豊かな情緒を形成する場として海岸は貴重な空間」として,

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

** 国立大隅少年自然の家 The Osumi National Children's Nature Center

「いきいき・海の子・浜づくり」整備の全国19地域（表1）を選定した。その後、各地域では協議会も始まり、今後海岸整備等が行われ、文部省所管の教育関連施設と連携しながら、子供たちへの海浜活動及び海洋スポーツ活動が展開されつつある。

また現在、国内の小中学校の学校教育における自然体験の1つの媒体としてカヌー、カッター、ヨット等の海洋スポーツ種目を取り入れる学校が

表1. 「いきいき・海の子・浜づくり」整備選定19地域

No	整備海岸名	場 所	拠点となる教育関連施設
1	川内港海岸	青森県川内町	
2	加茂港海岸	山形県鶴岡市	県立加茂水産高校
3	神津島港海岸	東京都神津島村	
4	柏崎港海岸	新潟県柏崎市	
5	小浜漁港海岸	福井県小浜市	県立小浜水産高校
6	大浜海岸	福井県小浜市	国立若狭湾少年自然の家
7	駿河海岸	静岡県焼津市	県立焼津青少年の家
8	宇津江漁港海岸	愛知県渥美町	
9	東播海岸	兵庫県明石市	市立明石少年自然の家
10	生口港海岸	広島県瀬戸田町	
11	沖浦港海岸	山口県大島町	
12	角島港海岸	山口県豊北町	
13	窪川海岸	高知県窪川町	
14	三崎港海岸	高知県土佐清水市	
15	江樋戸港海岸	熊本県大矢野町	
16	芦北海岸	熊本県芦北町	県立芦北青少年自然の家
17	姫島港海岸	大分県姫島町	
18	西之表港海岸	鹿児島県西之表市	
19	垂水海岸	鹿児島県垂水市	国立大隅少年自然の家

表2. 過去3年間の各施設の小中学校利用数の変化

施 設 名	平成7年度	平成8年度	平成9年度
大阪府立青少年海洋センター（大阪府）	124	158	114
YMCA阿南国際海洋センター（徳島県）	39	54	74
B & G財団滝川海洋センター（北海道）	0	2	25

表2のように全国的に増えつつあり、取り入れるための様々な試みがなされている。

例えば、大阪府立青少年海洋センターを利用する学校は、自然学習の一環としてカッターやヨットを体験し、YMCA阿南国際海洋センター（徳島県）を利用する学校は、カヌー、カッター、ヨットなどを主な目的に集団宿泊体験学習を行っている。またB&G財団滝川海洋センター（北海道）を利用する学校は、修学旅行の中の1つの体験プログラムとして、カヌー、ヨット等の海洋スポーツ活動の体験を行っている。これらの活動は、大部分の学校において「学校行事」として取り扱われている。

一方、海洋スポーツ活動を活動プログラムとして提供している施設は、国立オリンピック記念青少年研修センター発行の全国青少年教育関係施設ガイドによると1995年度末で全国に142施設、またその他に（財）B&G財団が整備している地域海洋センターが全国に154カ所があり、あわせて全国に約300施設がある。

また、学校行事ではなく授業として海洋スポーツ活動を取り入れている外国の事例として、1983年からニュージーランドのオークランド市内において小・中学生を対象にヨットやカヌーに親しみながら水辺の安全知識の会得を目的とする「WATER WISE」という授業がカリキュラムの中に組み込まれている。日本においても、1985年頃から初めて教科体育の内容として「ヨット種目」を取り入れた例に山形県の鼠ヶ関小学校などがある。

しかし、学校単位で海洋スポーツ活動を行うためには、①多人数で使用可能な基地となる施設、②カヌー、カッター、ヨット等の海洋スポーツ用具、③その用具の使用法や技術指導のための指導者及び指導体制、④陸上とは違った海という場所での指導内容（プログラム）、⑤安全に行うための対策等が必要となってくる。したがって、海洋スポーツ活動を実施するためには、この“条件”をとくに整備する必要がある。

そこで本研究では、教科体育にヨット種目を導入している鼠ヶ関小学校の取り組みにおいて、活動を行うための施設、用具、指導者や指導体制、

指導内容（プログラム）、安全対策等の“条件”をどのように整備し実施しているか報告するものである。

取り組み概要

1. 利用施設

鼠ヶ関小学校では、活動を行う施設として学校より1 km程離れた小学生の徒歩圏内にある「鼠ヶ関マリーナ」を利用している。

このマリーナは、山形国体「ヨット競技」開催時に整備されたマリーナでクルーザーヨット、モーターボート、ディンギーヨット等保管を主な業務としているが、週末を中心に中高校生が課外活動としてヨットの活動を行っている。

2. 使用用具

用具として使用するヨットの艇種は、オプティミスト・ディンギー・ヨット（通称OP級ヨット）を使用している。使用数としては、最大8艇を使用している。

このOP級ヨットは、1954年アメリカのクラーク・ミルズ氏が子供専用ヨットとして設計している。全長2.30m、全幅1.31mで強風下でも高い安定性を保つことができ、容易に操船できる国

際規格の艇種である。マリーナには、このOP級ヨットが国体開催前に山形県のヨット競技の強化を目的に子供用のトレーニング・ヨットとして多数購入配備された経緯がある。（図1）

3. 指導者及び指導体制

指導者は、学校関係者である校長，教頭，教務担当，養護教諭，担任など約10人が積極的に関わっている。また，専門指導者としては，国体開催を契機に町自体がヨット振興に力を入れたことにより，町教育委員会社会教育課に配置されたヨット指導員2人とマリーナの指導員3人の協力を仰いでいる。したがって，最大15人（平成9年度）の指導スタッフで，授業を実施している。

指導体制は，専門指導者5人を中心に陸上（スロープやボンズン）及び海上（救助艇）から技術指導を行い，学校関係者10人は主に活動中の子供たちの海上監視及び棧橋，スロープに待機している子供たちの安全管理を行っている。

4. プログラム内容

1) 鼠ヶ関小学校教科体育「ヨット種目」の平成9年度ヨット指導計画について

本小学校のヨット種目の指導計画作成については、「ヨット種目」を教科体育に導入する際，町内に在住するヨット関係者と十分な検討を重ねた上で作成されている。

また時間数については，海での授業数が4年生で2回，5・6年生で3回と少ないことから，学校内において児童に対し事前学習会も開いている。1回の授業は，14時から16時までの午後の4限，5限の2限（コマ）を利用し行われる。

事前学習会では，ヨットの帆走理論，使用するヨットの各部名称と役割，艀装に必要なロープワークそして実際にヨットの組立（艀装）を行い理解を深めている。

海上での1回目の授業では，実際にマリーナにおいて風とセールの関係，指導員による

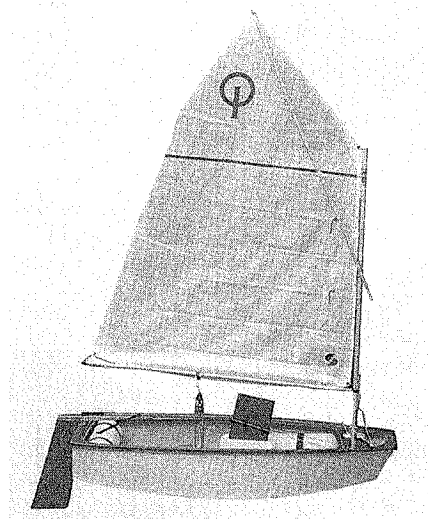


図1 使用用具「オプティミスト・ディンギー・ヨット」

模範帆走見学, 実際に海上において帆走や舵の操作等を行っている。

2 回目の授業では, 帆走中におけるタッキングやジャイビングなどの方向転換の体験とアビームでの帆走を行っている。

3 回目の授業では, 風向きによるセールの調節と風上への走り方を体験し, 授業の総仕上げともいうべき三角コースの帆走を行っている。(資料1～3)

2) 指導内容及び実現(到達)目標

指導目標については, 表3の通りである。

教科体育としてヨット種目を取り入れるに当たり, 各学年各回において限られた時間内において実現可能な目標を, 地元ヨット関係者と検討を重ね設定されている。また, ただ単にヨットの帆走技術を身につけるだけでなくシーマンとして基本的に1人で艀装(準備)から解装(後始末)まで行うことにも重点が置かれている。

そのため担任もヨット指導員より事前にヨットで使用するロープワークやヨットの組立て(艀装), 帆走の原理等について指導を受け研修している。(表3)

表3. 学年・実施会別到達目標 作成: 鼠ヶ関小学校

	4 年 生	5 年 生	6 年 生
1 回 目	指導者の指示通りにヨットの艀装をしたり, 操船をしたり, 後片付けの仕方を理解し, 行える。	指導者の指示で確実な艀装や操船・帆走をしたり後片付けができる。	一人で艀装してマリーナ湾内において帆走できる。
2 回 目	指導者の指示で艀装して確実な操船・帆走や後片付けができる。	一人で艀装してマリーナ湾内において帆走できる。	マリーナ湾内・海上において確実な操船・帆走ができる。
3 回 目		マリーナ湾内・海上において確実な操船・帆走ができる。	友達やお世話になった指導者の方々への感謝の気持ちを持つことができる。

3) 授業参加者数

表3のように授業参加者数は, 鼠ヶ関小学校自体が小規模校ということで毎年1学年1クラス編成の40人前後で行っている。(表4)

表4. 過去3年間の授業参加者数(人)

	平成7年度	平成8年度	平成9年度
4年生	46	36	41
5年生	31	46	36
6年生	40	31	46

5. 安全対策

安全対策として, 授業で使用するマリーナが東北地方の日本海側の外海に面していることから授業で使用する海面は, 季節的に海上が静穏な時期に平水面であるマリーナ湾内の1部を使用して行われる。広さとしては, 5,260㎡(約75m×70m)があり, 水深も2m程度である。四方を防波堤及び棧橋で囲まれており, 指導及び監視の容易な海域である。

また, 子供たち全員にライフジャケット(救命胴衣)の確実な着用を義務づけ, 指導側は海上に救助艇1艇を配備し海上監視・救助を行い, マリーナ湾内を囲む堤防や棧橋からも学校関係者が監視を行っている。

さらに風の強さによっては, 授業で使用するヨットの数を減らすなどの対策をとっている。

「ヨット種目」取り組みモデル

図2は, 鼠ヶ関小学校が教科体育においてヨット種目を実施するために学校, 教育委員会(行政), マリーナ(地域)がどのように関わって取り組んでいるかまとめたものである。

一般的に教科体育で取り扱われる種目については, 野外活動なども積極的に取り扱えるようになっているが, 基本的に学校内のグラウンドや体育館で実施可能な運動種目が取り扱われることが多い。また, 授業の指導に当たって小学校においては,

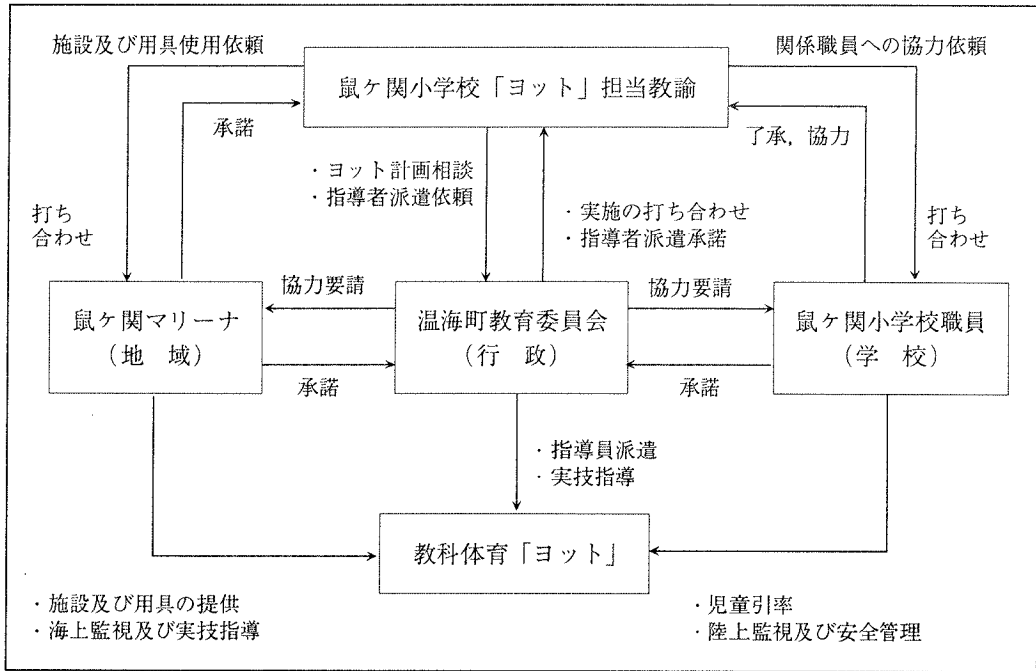


図2. 鼠ヶ関小学校のヨット授業取り組みモデル

担任教諭が1人で行う場合がほとんどだが、取り扱う内容によっては、他教諭や外部指導者とのチームティーチングによる指導も散見される。中学校においては、従来、保健体育科教諭が主に1人で行っていることが多かったが、運動の選択制授業の導入によって、複数教諭や教諭と外部指導者とのチームティーチングによる指導が増えてきている。

ヨット種目は、学校外それも海という場所で実施されることから、本小学校では、こうした指導体制の傾向を先取りするかたちで、多くの関係者のチームティーチングによって1学年に対して年に2～3回の授業を行っている。

具体的には、担任教諭だけでなく関係教職員も積極的に支援し、また、教育委員会自体もヨットの指導を行える職員を配置し、活動時に指導員の派遣を行っている。さらに利用施設であるマリナーにおいても、施設の使用及び用具の貸与だけでなく、マリナーの職員も授業時には指導員として

指導や監視などの積極的に協力を行っている。

このようなことから、海洋スポーツ活動において一番重要となってくるソフト面としての指導体制や安全対策が学校関係者だけでなく、関わり合う教育委員会、マリナーの三者が協力しあって取り組むことによって、ヨットを教科体育の学習内容の1種目として円滑に行えていると考えられる。

一方、ニュージーランドのWATER WISEをみると、設立の経緯がニュージーランド・ヨット協会とニュージーランド文部省により提案され、実施されたため、指導システムやプログラム開発については積極的にニュージーランド・ヨット協会が行い、現場での指導は、学校の教師を中心にWATER WISEの指導資格を取得した父母のボランティア6～10名の協力によって展開されている。また用具については、ヒラリー財団からの助成や企業から資金提供を受け、WATER WISE委員会が用具を購入し、一定数配備している。その際セールと艇体に資金提供を受けた企業のロゴ

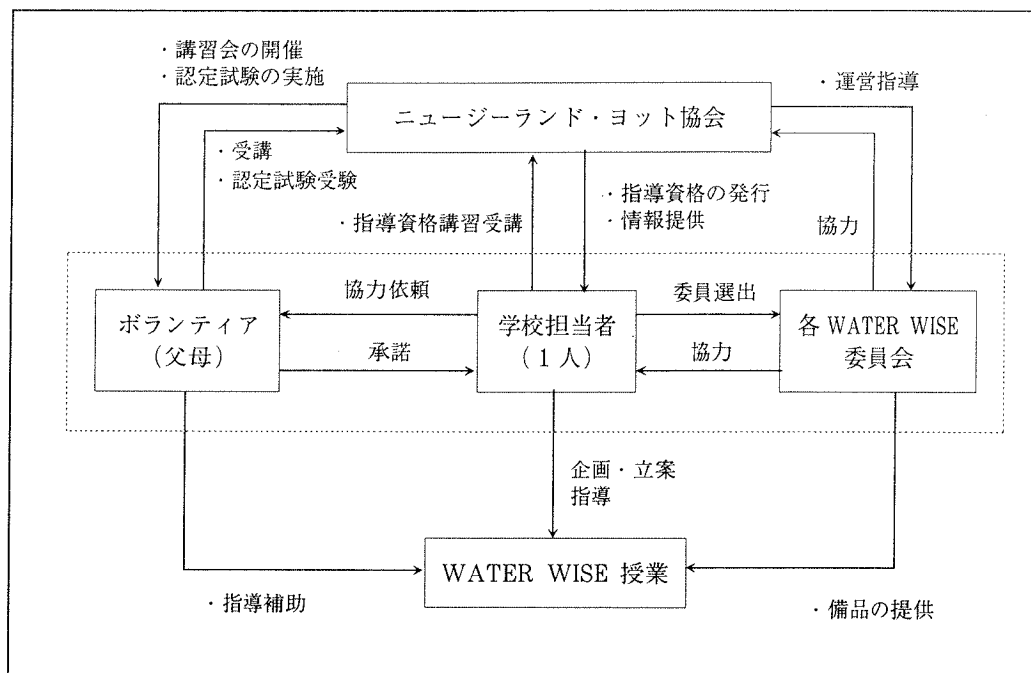


図3. WATER WISE 取り組みモデル

を一定期間表示するシステムがとられている。このようなシステムにより WATER WISE は、身近な地域での活動を可能にし、現在オークランド市内だけで9カ所あり、50校近くの小中学校が交代で使用している。

このように、WATER WISE は、学校教育として機能する公的な組織ではあるが、それを現場で実質的に支えているのは子供の親など、地域のボランティアの力によるところが大きい。

取り組み条件

以上のようなことから、国内でヨット種目を教科体育に取り入れている鼠ケ関小学校の事例とオークランド市の WATER WISE とを比較検討すると、教科体育ヨット種目の円滑な実施として次のような条件が上げられる。

1) 鼠ケ関小学校がある温海町では、国体開催を契機に町自体がヨットをシンボルスポートとして掲げ、また WATER WISE のあるオークラ

ンド市は愛称を“City of Sails”と掲げ、どちらも行政自体が積極的にヨット活動の推進・支援を行っている。

2) 施設・用具においては、鼠ケ関小学校は町内にあるマリーナを利用し、そこに配備されているヨットを活用している。また WATER WISE では、地元のヨットクラブの艇庫を利用し、そこに寄付や企業からの資金提供によって購入し配備されたヨットやカヌーを使用している。双方とも近接のヨットの施設・設備を有効に活用している。

3) 指導者として、鼠ケ関小学校は、教育委員会のヨット指導員、マリーナ指導員等の専門指導者の協力を得て、学校教職員との三者の協力による指導体制がとられている。また、WATER WISE においては、学校教員と父母を中心とするボランティアにおいて授業を行っているなど、学校関係者以外のヨット指導能力を有する地域の人の積極的な協力を得ている。つまり、教師

と地域の指導者とのチームティーチングが効果的に行われていると言える。

4) 指導内容(プログラム)については、鼠ヶ関小学校では、ヨットの基礎技術の習得を考えた指導計画書、実施要項を町内ヨット関係者と検討を行い、学校独自に作成しているが、WATER WISE では、ニュージーランド・ヨット協会が中心となり水辺の安全知識の習得を第一に WATER WISE PROGRAM 及び WATER WISE INSTRUCTOR MANUAL 等を作成し、各 WATER WISE がそれに沿って授業を行っている。

5) 安全対策としては、鼠ヶ関小学校、WATER WISE とも季節的に海が静穏な時期及び海域において、救命胴衣の確実な着用、救助艇の適正な配備、陸上監視者の十分な配置など万全の安全対策を講じている。

ま と め

鼠ヶ関小学校は、ヨット種目を教科体育として定期的な授業の中で実施するために、必要とされる施設(マリーナ)、用具(ヨット、救助艇)は、近隣の施設を使用することでハード面としての条件は満たされている。また、指導者及び指導体制と安全対策等のソフト面としての条件は、学校の教職員のみならず教育委員会、マリーナの地域の三者が協力しあって取り組む工夫によって可能となっている。

今日、学校教育において子供たちに自然教育や環境教育等が重要視される中、水の楽しさや怖さ、安全の大切さを教えていく1つの方法として、プールだけでなく“生きた水”である海を活用した活動は必要であると考えられる。その“生きた水”を活用したプログラムの1つとして、ヨットやカヌー、カッター等の海洋スポーツ種目を学校教育の中に導入していくことも大いに考えられるであろう。そこで、実施するための条件としてあげた施設や用具については、全国に約300カ所ある海洋スポーツ活動施設を活用することにおいて条件を満たすことは可能である。しかし、指導者及び指導体制や安全対策については、担任もしくは体

育担当教師及び学校関係者だけで行うには無理があり、負担が大きすぎるのが現状である。したがって、鼠ヶ関小学校の事例や WATER WISE のように、学校関係者も積極的に海洋スポーツ種目について知識や理解を深めるとともに、教育委員会や地域の専門家、協力者などのボランティア等を巻き込み協力を得る工夫が必要である。そうすることにより、海洋スポーツ活動を可能にし、安全、円滑に、また充実して行えると考えられる。さらに学校責任者である校長自ら理解を深め、活動についても子供たちと一緒に参加することは、学校教育における海洋活動の“導入きっかけ”の大きな要因の1つになると考えられる。

海洋スポーツ活動は、他のスポーツ活動と比べて危険性を大いに孕む活動で、学校関係者だけでは実施が難しい活動であると認識されがちであるが、積極的に地域を巻き込んだソフト面の工夫と、責任者の理解があれば、教育内容として十分実施可能な活動である。

今後、文部省・中央教育審議会が提唱する子供たちの「生きる力」をはぐくむために、青少年教育における海洋活動等を一層重視していくならば、こうした活動に対する教育関係者のより一層の理解が求められるとともに、指導体制や指導内容の実践的研究を充実する必要がある。指導体制の充実には、まず、指導者の資質向上のために、知識・技術の習得の場や機会の提供が必要であり、さらに、指導者の水準を保証する上でも一定の資格を付与することも重要である。そこで、教員免許の取得ができ、国立大学中で唯一海洋スポーツの専門教育を行っている本学への期待は今後一層高まるであろう。また、地元の小学校、中学校を対象に教科体育の中に海洋スポーツを導入する実践的研究を展開することも求められるであろう。

付 記

本報告をまとめるに当たり、山形県温海町立鼠ヶ関小学校長山本洋子氏には寛大なご理解をいただき、また、教務担当の小野寺氏、には、貴重な資料を提供していただいた。この紙面を借りて感謝の意を表したい。

参考・引用文献

- 1) 谷 健二, 柳 敏晴, 濱田幸二, 平野貴也: 少年少女期における海洋スポーツ活動に関する研究—体験学習「わんぱくチャレンジャー」を事例として—鹿屋体育大学学術研究紀要第16号, pp121-127, 1996
- 2) 萩裕美子: 健康づくりを支援する地方行政の取り組みについて—鹿屋市におけるウォーキング実践活動の事例報告—鹿屋体育大学学術研究紀要第15号, pp137-141, 1996
- 3) 文部省: 小学校学習指導要領(平成元年3月), 大蔵省印刷局, 1989
- 4) 文部省: 中学校学習指導要領(平成元年3月), 大蔵省印刷局, 1989
- 5) 文部省: 小学校指導書体育編(平成元年6月), 大蔵省印刷局, 1989
- 6) 中谷三男: 海の多様化への対応と課題, 産業教育文部省職業教育課編, 第44巻第2号, pp21-24, 1994
- 7) Water wise Instructor Manual, Yachting New Zealand
- 8) 笹川スポーツ財団: ウォーターワイズ/Waterwise, 陽は南からのぼる—ニュージーランド・オーストラリアのマリンスポーツ—, pp13-16, 1993
- 9) ヤマハ発動機株式会社広報室: ヨットの意外な活用法, YAMAHA MARINE INFORMATION 2・3, p2, 1996
- 10) 田久保勝巳: 小学生から老人まで生涯ヨットを楽しむ理想郷, KAZI, 第62巻14号, pp74-77, 1996
- 11) 斉藤愛子: 小学校の正規授業となったウォーターレジャーへの取り組み, Yachting, 第11巻第10号, pp18-21, 1997
- 12) 酒井哲雄, 松下雅雄, 谷健二: 学校教育における海洋スポーツ活動の実態に関する調査研究, 鹿屋体育大学海洋スポーツセンター海洋スポーツ研究第3号, pp56-71, 1998
- 13) 酒井哲雄, 西川泰行, 谷健二: 学校教育における海洋活動に対する中学生の意識の変化に関する調査研究—徳島県内の山間及び内陸部の中学生を対象として—, 鹿屋体育大学海洋スポーツセンター海洋スポーツ研究第3号, pp72-99, 1998

資料 1. ヨット教室指導計画 (4 年生)

	指 導 項 目	具 体 的 な 指 導 内 容
事前学習会	① ヨットについて ② ヨットの各部の名称を覚える ③ 基本的なロープワーク ④ 艀装のしかた	○ヨットの走り方について ・風の力を利用して動くこと。 ・風に向かって進むことができること。 ○マリーナの使い方について ○OP (オプティミストディンギー) のつくりや部品, 付属品の名称を覚える ・セール, マスト, スプリットポール ・ブーム, バテン, ティラー, ラダー ・センターボード, メインシート ・パドル, もやいロープ, パウ ・スターン, ハル, ライフジャケット ・クリート, フットベルト ○OPに必要なロープワークを覚える ・ボーラインノット (もやい結び) ・エイトノット (8の字結び) ○ロープワークをマスターする ○艀装のしかたを覚える
第一回	① 風の向きを考える ② 艀装 ③ 舵の使い方 ④ 出艇準備 ⑤ 模範帆走 ⑥ 出艇 ⑦ 帆走 ⑧ 着艇 ⑨ 艀装解除と後片付け	○風上と風下を知り, ヨットの進む方向を考える ・風上: 風が吹いてくる方向 ・風下: 風が吹いていく方向 ○事前学習会で覚えた艀装を確実にやる ○ロープワークをやってみる ○舵のきり方と船の進む方向との関係を知る ○2人組になって準備をする ○準備ができたなら確認してもらう ○指導員の模範帆走を見て走り方を習得する ○舵の使い方を覚える ○ヨットを動かしてみる ○風下から風上に向かって着艇する ○次に使う人が使えるように, しっかりと後片付けをする
第二回	① ロープワークテスト ② 艀装 ③ 模範帆走 ④ 出艇 ⑤ アビームを走る ⑥ 着岸 ⑦ 艀装解除と後片づけ	○事前に学んだロープワークを確認する ・ボーラインノット ・エイトノット ○できるだけ短時間に, 確実な艀装ができるように時間を計って実施する (目標 20分) ○タッキング, ジャイピングの意味を知り体の動きと, 船の向きを理解する。 ・タッキング(タック): 風上に向かって進んでいる時に進行方向を変えること ・ジャイピング (ジャイブ): 風下に向かって進んでいる時に進行方向を変えること ○スムーズに出艇できるようにする ○アビーム (真横から風を受けて走る) の走り方を覚える ○風の向きを考えて艇を着岸させる (風下から風上に向けて艇を着ける)
第三回	① 艀装 ② セールを調整して, 走り方を工夫する方法 ③ 出艇 ④ 同じところにいる練習 ⑤ 着艇 ⑥ 艀装解除と後片付け ⑦ 感想と反省	○時間を計っての艀装 (目標15分) ○風を受ける方向によって, セールの出し方を変える調整の仕方を身に付ける ○クローズドホールド (風上に向かう走り方) の走り方を覚える ○手際よく出艇する ○ヨットを止めること ○マリーナ外に出て帆走する ○レスキュー艇の後に遅れずについていく ○ブイを打ち, 三角コースをまわる ・それぞれのコースを風を考えながら走ることがきるか ○風下から風上に向けて艇を着ける ○うまくいったところやわからないところを反省し, 次回への目標とする

資料2. ヨット教室指導計画(5年生)

	指 導 項 目	具 体 的 な 指 導 内 容
事前学習会	① ヨットについて ② ヨットの各部の名称を覚える ③ 基本的なロープワーク ④ 機装のしかた	○ヨットの走り方について ・風の力を利用して動くこと。 ・風に向かって進むことができること。 ○マリーナの使い方について ○OP (オブティミストディンギー) のつくりや部品, 付属品の名称を覚える ・セール, マスト, スプリットポール ・ブーム, バテン, ティラー, ラダー ・センターボード, メインシート ・パドル, もやいロープ, パウ ・スターン, ハル, ライフジャケット ・クリート, フットベルト ○OPに必要なロープワークを覚える ・ボーラインノット (もやい結び) ・エイトノット (8の字結び) ○ロープワークをマスターする ○機装のしかたを覚える
第一回	① 風の向きを考える ② 機装 ③ 舵の使い方 ④ 出艇準備 ⑤ 模範帆走 ⑥ 出艇 ⑦ 帆走 ⑧ 着艇 ⑨ 機装解除と後片付け	○風上と風下を知り, ヨットの進む方向を考える ・風上: 風が吹いてくる方向 ・風下: 風が吹いていく方向 ○事前学習会で覚えた機装を確実にやる ○ロープワークをやってみる ○舵のきり方と船の進む方向との関係を知る ○2人組になって準備をする ○準備ができれば確認してもらう ○指導員の模範帆走を見て走り方を習得する ○舵の使い方を覚える ○ヨットを動かしてみる ○風下から風上に向かって着艇する ○次に使う人が使えるように, しっかりと後片付けをする
第二回	① ロープワークテスト ② 機装 ③ 模範帆走 ④ 出艇 ⑤ アビームを走る ⑥ 着岸 ⑦ 機装解除と後片づけ	○事前に学んだロープワークを確認する ・ボーラインノット ・エイトノット ○できるだけ短時間に, 確実な機装ができるように時間を計って実施する (目標20分) ○タッキング, ジャイビングの意味を知り体の動きと, 船の向きを理解する。 ・タッキング(タック): 風上に向かって進んでいる時に進行方向を変えること ・ジャイビング (ジャイブ): 風下に向かって進んでいる時に進行方向を変えること ○スムーズに出艇できるようにする ○アビーム (真横から風を受けて走る) の走り方を覚える ○風の向きを考えて艇を着岸させる (風下から風上に向けて艇を着ける)
第三回	① 機装 ② セールを調整して, 走り方を工夫する方法 ③ 出艇 ④ 同じところにいる練習 ⑤ 着艇 ⑥ 機装解除と後片付け ⑦ 感想と反省	○時間を計っての機装 (目標15分) ○風を受ける方向によって, セールの出し方を変える調整の仕方を身に付ける ○クローズドホールド (風上に向かう走り方) の走り方を覚える ○手際よく出艇する ○ヨットを止めること ○マリーナ外に出て帆走する ○レスキュー艇の後に遅れずについていく ○パイを打ち, 三角コースをまわる ・それぞれのコースを風を考えながら走ることがきるか ○風下から風上に向けて艇を着ける ○うまくいったところやわからないところを反省し, 次回への目標とする

資料3. ヨット教室指導計画（6年生）

	指 導 項 目	具 体 的 な 指 導 内 容
事前学習会	① ヨットについて ② 昨年度の復習	○昨年度学んだヨットの乗り方を思い出す ○ヨット競技についてその特筆を理解する ・ヨットレースのルール ・レースに勝つ方法 ・ヨットレースのマナー ○ロープワーク ・ボーラインノット（もやい結び） ・エイトノット（8の字結び） ○各部の名称 ○艀装の方法
第一回	① 風上と風下をつかもう ② 艀装 ③ 出艇 ④ 帆走練習 ⑤ 三角コースを回る ⑥ 着艇と艀装解除 ⑦ 感想と反省	○風の方向を知ることが，ヨットをマスターするための条件であることを認識する ・風の方向：旗や風見，波の立ち方，顔に当たる感触で実感できるようにする ○艀装が確実にできるかどうか ・メインシートの通し方，もやい結び ・セールとマスト，セールとブームの固定（隙間が1cm以内になるようにセットする） ・スプリットボールの取り付け ・パテンがきちんと入っているか ○2人が協力して準備する ○アビームで走る ・セールの出し方を調整しているか ○クローズドホールド ○タックとジャイブはできるか ○三角形に打ったブイのまわりを，それぞれの走り方を考えながら回ってみる ○風を考えながら着艇する
第二回	① 艀装 ② セールを調整して，走り方を工夫する方法 ③ 出艇 ④ オリニピックコースを回る ⑤ 着艇 ⑥ 艀装解除と反省	○できるだけ短時間に，確実な艀装ができるように時間を計って実施する（目標20分） ○風を受ける方向によって，セールの出し方を変える調整の仕方を身に付ける ○手際よく，協力して出艇する ○三角形にブイを打ち，オリニピックコースを回る練習をする オリニピックコース スタート→1マーク→2マーク→3マーク→フィニッシュ
第三回	① 艀装 ② 出艇 ③ レース練習 ④ 着艇 ⑤ 艀装解除と後片付け ⑥ 反省と質問	○時間を計って正確に艀装する（目標15分） ○確実に素早い出艇をする ○海に出たら，なるべく早く風をつかんで帆走できるようにする ○スタート練習 ・スタートラインの前でスピードを落とし，同じところにいられるようにする ・風上に向かってのレース （タックが確実にできるようにする） ・風下に向かってのレース （バランスよくジャイブができるようになる） ○素早く後片付けする